

「こまつ」 komatsu 「もん」

特集

古代から続く、小松の石の物語

小松と言えば、小松うどん！

小さな旅 初夏の「植樹祭メモリアルライン」を歩く

こまつもん 2015 春・夏 vol.7 2015年7月発行 発行/小松市環境共生部環境王国こまつ推進本部 TEL:0761-24-8078 編集/チームリアルこまつ

小松 食の 歳時記

初夏の彩り、
カタハの煮物

春から初夏にかけて、小松の里山では様々な山菜が採れる。ワラビ、ゼンマイ、コゴミ、タラの芽等々。カタハはタラの芽などが終わる頃、里山の湿気が多い場所です採れる。片方に葉が付くところからカタハと呼ばれるが、富山県ではヨシナ、全国的にはミズやウワバミソウと呼ばれる。茹でると鮮やかな緑になり、シャキシャキした食感でクセもない。油揚げやニンジンと煮て食べたり、汁物の具にしたり、炒めものにしても美味しい、里山の万能食材である。



里山自然学校こまつ滝ヶ原にて
第四回環境王国こまつ山菜検定を実施



小松市では里山地域の活性化の取り組みとして、平成二十四年（二〇一二年）から、東京家政大学の中村信也教授監修のもと、環境王国こまつ山菜検定を実施している。四回目となる今年も、中級試験に合格した二十名が上級試験に挑戦した。今年が初めての実施となる上級試験は、山菜の写真を見て名前を答える筆記試験に加え、料理に使われている山菜を食べて当てる実食試験が行われた。試験用の山菜料理は、東京で薬膳料理の講師として活躍する篠崎比呂さんが考案したもので、地元のお母さん方により調理された。上級試験に合格すると山菜達人という称号が与えられる。

小松の里山の恵みが
東京・青山の
ファーマーズマーケットに

小松市の里山を生かした地域づくりに取り組むこまつSATOYAMA協議会は、里山で採れる山菜を東京青山で定期開催されるファーマーズマーケットで販売する試みを始めた。初回の販売では、タラの芽や乾燥ゼンマイ、ウドなどが人気であった。今後は首都圏でのニーズを探りながら、小松の山菜を含めた農産物ブランドの認知度向上とビジネスへの発展につなげていきたいと考えている。



青山ファーマーズマーケットの詳細は
ホームページを参照ください。
<http://farmersmarkets.jp/>

小松市的那谷・菩提・滝ヶ原で
産出する様々な鉱石

りゅうもんがん
流紋岩



へきぎよく
碧玉



めのう
瑪瑙

むらさきすいしょう
紫水晶(アメジスト)



瑪瑙

瑪瑙の原石と八日市地方遺跡出土の瑪瑙製垂飾。



不定期で開催されるミネラルウォッチングは、小松市産の様々な鉱石の採取や標本作りなどが体験できると毎回人気。

い石を割り、丸く滑らかに研磨し、そこになんと極細の石の針で孔を開ける。驚嘆すべき高度な技術である。この小松の碧玉加工技術は当時、日本の最先端のものであった。

火山活動が生み出したバラエティ豊かな小松の石と、日本海に運ばれた碧玉石材

今 からおよそ千七百万年前頃、急激な地殻変動により日本海側では火山活動が活発となり、火山灰と火山礫が堆積した日本海グリーンタフ(緑色凝灰岩)地帯が形成される。火山活動による熱水は銅などの鉱床を形成し、また瑪瑙や水晶、碧玉、そして



那谷・菩提・滝ヶ原地区では現在でも碧玉などの鉱石を見つけることができる。

古代から続く、小松の石の物語

時の流れの中で、多くの人々を魅了した小松の石は、小松ブランドの原点だった。



直径2ミリの円柱の碧玉に石の針で直径1ミリの孔を開けるといふ小松の弥生人のスゴワザ。

八日市地方遺跡出土の碧玉製品は、サイエンスヒルズこまつで見学できる。

サイエンスヒルズこまつ
MAP [15 ページ①]
小松市こまつ杜2
TEL.0761-22-8610

多くの管玉や玉づくり工程品を含む八日市地方遺跡の出土品、1020点は国の重要文化財に指定されている。写真の勾玉の材料である翡翠は、現在の新潟県糸魚川から八日市地方遺跡に運ばれて加工された。小松で加工された管玉や勾玉は、日本海を海路で九州の王へと運ばれた。

考古学界が注目する小松の碧玉や管玉、小松城の見事な天守台石垣、世界的な建設機械メーカー・コマツのルーツである遊泉寺銅山や尾小屋鉱山、数々の名建築に使われた日華石(観音下石)など。

小松の石の文化は、古代から現代まで、二千年以上もの永きに渡り、多様で豊かである。

驚愕の加工技術！
古代の小松人が作った「緑」のアクセサリ

縄文時代の初め、小松産の石器を作っていた小松の縄文人は、やがて弥生時代になると、北部九州からの「緑」の玉の需要に応えるため、碧玉の管玉や翡翠の勾玉などを作るようになる。小松ブランドの原点がここに誕生した。

「緑」は自然と生命の象徴であり、安らぎや癒やしを感じるのは現代人も同様。「緑」でしかも朽ちることのない玉を身につけるといふのは、権威の象徴であると同時に、不変の力を身に付けることで悪霊が侵入するのを防ぐという護符のような意味があったのかもしれない。

JR小松駅の東に広がる弥生時代中期の八日市地方遺跡から、六百キログラムもの碧玉が出土した。その中には直径二ミリの碧玉の円柱に直径一ミリの孔を開けた精巧な管玉がいくつも見つかった。硬

九谷焼に欠かせない花坂陶石などの様々な鉱物を生み出した。

日本海側に広がるグリーンタフ地帯だが、良質の碧玉を採取できるのは小松の那谷・菩提・滝ヶ原地区を含め、国内では四カ所に限られる。にもかかわらず西日本各地で多くの産地不明の碧玉石材が出土していた。それが近年、科学分析の結果、謎の碧玉石材の産地が小松の那谷・菩提・滝ヶ原産だという可能性が高まった。

良質で豊かな碧玉原産地を背後にし、玉づくりで日本最高の技術を誇った小松の八日市地方遺跡は、日本海を経路とした碧玉製品・碧玉原石流通でも日本の最重要拠点であったと考えられている。

小松ブランドの 終焉と復活

紀元前五十年頃、八日市地方遺跡が突然活動を停止すると、それまで碧玉の管玉や石材の供給を受けていた西日本は大混乱に陥り、新たな原石探しが行われる。

と出雲産の碧玉と比べて彫刻装飾が容易であった小松産の碧玉が再び注目され、ヤマト王権から多くの碧玉製腕輪が加賀地域に発注されるようになり、小松産碧玉による製品は再びシェアナンバーワンに再び咲いた。小松ブランドの復活であった。

城マニアでなくても ぜひ見て欲しい、 小松城天守台の石垣

古墳時代の後期、ヤマト王権が律令制の国へと移行する過程で碧玉製品の需要が消失し、小松の玉づくりは終わってしまったが、その後も中世、近世へと小松のグリーンタフ地帯から産出される様々な鉱石・石材は石塔や石仏、建物の基礎などに用いられ続ける。

近世の小松の石文化で最も注目すべきは小松城の石垣であろう。

加賀藩第二代藩主・前田利常公の隠居城として築城された小松城は、桃山文化

の伝承に力を尽くした利常が心血を注いだ名城であった。この天守台石垣は、築城技術がピークに達した時期に築かれただけに、切り込みハギと呼ばれる当時の最新工法により精巧に積まれており、洗練されていて非常に美しい。石垣には金沢の戸室石の他、小松産の鶺鴒石が用いられていて、異なる色合いの石が美しいパッチワーク風の意匠を作り出している。

小松城天守台石垣。この石垣の上には風流な二重三階の数寄屋造りの櫓があった。小松市丸内町(芦城公園近く、小松高校グランド横)

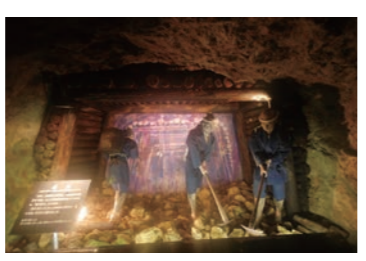


大王への献上品として作られた、菩提・滝ヶ原産の碧玉製の腕飾り。奈良県磯城郡川西町島の山古墳出土の腕輪形石製品(写真提供:奈良県立橿原考古学研究所)

維新後の金沢の 経済と文化を支えた 二つの鉱山

江戸時代に金山として開発された尾小屋鉱山は、明治十三年(一八八〇年)に加賀藩の家老であった横山

家が経営に加わり、銅鉱石の鉱脈が発見されたことをきっかけに隆盛期を迎えた。一時は銅の生産量日本一を誇り、「北陸の鉱山王」と呼ばれた横山家の財力は、小松だけでなく、明治維新後、急速に衰えた金沢の経済をも支え、加賀百万石の伝統文化の継承に寄与したとも言われている。



尾小屋鉱山資料館
MAP[15 ページ②]
小松市尾小屋町カ1-1
TEL.0761-67-1122

もう一つの鉱山、遊泉寺銅山も江戸時代に開鉱されていたが、本格的に開発したのは、のちに小松製作所(現コマツ)を起す竹内明太郎。明治三十五年(一九〇二年)のことだった。竹内は吉田茂元首相の

実兄で、最盛期の大正初期には従業員千六百人、家族を含め五千人が住む鉱山町を作り上げた。銅山自体は経済環境の変化で大正九年(一九二〇年)に閉山となったが、竹内が銅山の付属施設として設立した鉱山機械製造の小松鉄工所は、大正十年(一九二一年)に小松製作所となり、現在のコマツへと続いている。

滝ヶ原石と貴重な 滝ヶ原アーチ石橋群

滝ヶ原石の歴史は古く、小松城や金沢城の石垣、福井県丸岡市の丸岡城の石垣の外階段などにも使われている他、基礎石や鳥居、灯籠、墓石など様々な用途に使用され、近畿地方や北海道方面にも運ばれた。また、滝ヶ原には明治後期から滝ヶ原石で造られたアーチ型の石橋(市指定文化財)が五つ残っている。昔、洪水が起きる度に木製の橋が流されたため、住民が町の石工に京都でアーチ型橋の技術を学んで



小松市滝ヶ原町(見学ガイドをご希望の方は、里山自然学校こまつ滝ヶ原 TEL.0761-65-2436 まで)

きてもらって作ったものだという。国内で一つの地域でこれだけまとめて石橋が架けられたのは九州地方以外ではここ滝ヶ原だけである。



遊泉寺鉱山跡 小松市鷺川町地内



滝ヶ原石の石切り場(石材荒谷商店)



小松と西宮、二つの国の登録有形文化財に使われた銘石・日華石（観音下石）

かつての鉱山、尾小屋から四キロほど手前の町、観音下で石の切り出しが始まったのは大正時代の初め。当初は近隣の家屋の土台石や農家の倉庫に使われていたのが、尾小屋鉱山の鉱山鉄道として開通した尾小屋鉄道により運搬が容易と

なり、関西や関東にも出荷されるようになる。その温もりのある黄色い色合いと、二度の小松の大火でも石が割れずに残ったこと、湿気に強くカビが繁殖しにくいこともあって、国会議事堂など多くの建築物の他、奈良県の高松塚古墳などの遺



小松市観音下町の日華石（観音下石）の石切り場。

跡の復元にも使われている。小松市内では今もあちこちで蔵や石塀などに使われているのを目にすることができ、ぜひ見て欲しいのが、国の登録重要文化財に指定されている東酒造の酒蔵。蔵の低い部分は江戸切り仕上げとなっていて趣と同時に重厚感を感じさせてくれる。



夕日に映える日華石の石蔵。小松市内ではあちこちに日華石の石塀や蔵が点在する。

ため息が出るほど美しい、甲子園ホテルと日華石

西の帝国ホテルと言われた甲子園ホテル（現・武庫川女子大学 甲子園会館、国の近代化産業遺産、国の登録有形文化財）。

設計は、帝国ホテルを設計した近代建築の巨匠、フランク・ロイド・ライトの弟子の遠藤新。

『甲子園ホテル物語―西の帝国ホテルとフランク・ロ

イド・ライト』（三宅正弘著・東方出版）によると、ライトが帝国ホテルに使ったのは寒色系の青白い大谷石だったが、実は彼が本当に使いたかった石は、赤くて暖かい色の石だったそう。その石とは、小松市の菩提で採れた蜂の巣石（地元では菩提石と呼ぶ）。帝国ホテル設計時、東京には国会議事堂の

建設のための石の選定目的で日本全国の石のサンプルが集められていて、その標本室を訪れたライトは、小松の蜂の巣石を気に入ったらしい。ただし、蜂の巣石は産出量に限りがあり、産出量の心配がない大谷石に決まったということだ。

その後、ライトの愛弟子、遠藤新が甲子園ホテルに選んだ石は、師匠のライトが使いたかった小松の蜂の巣石と産地が同じ、小松の日華石であったのは興味深い。温もりのある黄色、大谷石より湿気に強く、丈夫でかつ細工がし易い日華石の特徴が、遠藤を惹きつけたのだろう。

現在、武庫川女子大学の甲子園会館となっていて宿泊はできないが、見学は可能。建築ファンでなくても、至福の時を過ごすことができる。



1階ロビー南側の底を支える波模様の日華石の列柱。



幾何学文様の日華石のレリーフ。



武庫川女子大学 甲子園会館（旧・甲子園ホテル）
兵庫県西宮市戸崎町 1-13
見学申し込みは 武庫川女子大学 甲子園会館 庶務課まで。
TEL.0798-67-0290（要予約）

小松といえば、 小松うどん!

市民が愛する
ソウルフード、小松うどん。
五木寛之氏が称賛する名店の
ルーツは小松にあった。



作家、五木寛之氏は金沢に住んでいた頃、よく「加登長」のうどんを食べたそうである。五木氏の著書、『五木寛之全紀行』金沢は「いまも雪かき」には、

金沢のうどんは、関西のように殊にコクがあるわけでもなく、関東のように濃い味でもない。ちやうど中間の、ややたよりない味なのだが、そこが持ち味ではあるまいか。関東のうどんはぶつぶつ切れる、しょうゆ味の真っ黒なつゆ。讃岐は噛みきれないほどの強いコシ。そこへいくと金沢は、ほどよい固さとうま味のあるつゆ。私は断然『加賀うどん』に一票を投じます。

と書かれている。

さて、五木氏が称賛している加登長のルーツが小松にあることはあまり知られていない。明治三十年（一八九七年）、鉄道が開通する直前、小松駅前角に加登長という屋号のうどん店が開店した。店を開いたのは、初代小松市長・和

田伝四郎氏の叔父・和田長平氏だった。この加登長が、現在金沢に二十数店舗ある加登長のルーツである。

その後、明治三十八年（一九〇五年）に、三津野菊松氏が現在の西町に「中佐」を開き、店舗が増え、やがてこれらの店で修業を積んだ人たちが「中音」、「中石」、「中定」、「中芳」などの屋号で独立し、小松うどんの名声が高まった。

松尾芭蕉も食した 小松うどん

小松うどんの歴史は、加登長が開店した明治よりさらに古く、江戸時代にまでさかのぼる。

元禄二年（一六八九年）、『奥の細道』の旅の途中、小松の俳人・塵生（じんせい）が乾うどん二箱を届けたのに対し、芭蕉が「殊に珍敷（めずらしき）乾うどん」をありがとうと書いた返書が残されている。

さらに元禄七年（一六九四年）の『小松旧記』では、小松町奉行から加賀藩の台所奉



建聖寺に伝わる木製の芭蕉坐像
(市指定文化財)

行にあてた返書「干饅飩のこと」の中に、細かい注文と、製造者として小松の八日市町の亀屋徳右衛門の名が記されている。加賀藩に納められた小松のうどんは、加賀名物として将軍や各大名に贈られたそう。

小松うどんの ブランド化と、 小松市産の 小麦の復活

小松うどんの特徴は、細めで程良いコシがある麺と、霊峰白山の伏流水を用い、魚の節を使ったあっさり味の

ダシにある。平成二十二年（二〇一〇年）の小松市制七十年を機に、小松うどんの地域ブランド化を推進するために「小松うどんつるつる創研」が誕生し、「小松うどん定義八か条」を定め、現在は七十店を越える店が小松うどんの定義を元に、各店舗が工夫を凝らした味を提供している。

さて、うどんの原料となる小麦。現在の国内産小麦の総生産量は約九十万トン。国内需要の約一五%でしかない。

小松市は大麦の生産量は県内一位で、約千トンを取穫するが、長らく小麦の栽培は行っていない。小松市では、JA小松市では、地産地消の流れに対応するため平成二十一

年（二〇〇九年）に二十七年ぶりに小麦の栽培を再開した。現在、石川県内で大規模に小麦栽培をしているのは小松市のみで、小島町、大島町、矢崎町、長崎町、佐美町、月津町の六町で栽培され、収穫された約百トンの小麦は乾燥調製された後、製粉され、小松うどんなどに使われる。

このように、小松うどんは店の努力、JA小松市や農家の方々の協力により、市民だけでなく、小松を訪れる観光客、ビジネス客の皆さまにも愛される地域グルメとして人気が高まっている。



※小松うどんに関するお問い合わせ
小松うどんつるつる創研事務局
TEL.0761-24-8200 <http://www.komatsu-udon.com/>



小松うどんは子どもたちにも大人気。
小松うどん道場 つるつと MAP[15 ページ③]
小松市土居原町 13-18 TEL.0761-23-2217



収穫間近の小麦畑（小松市矢崎町）

初夏の「植樹祭メモリアルライン」を歩く



憩いの森の吉竹堤。青空と木々の緑が湖面をグリーンに染めている。



植樹祭メモリアルラインの起点となる木場潟の中央園地。



四季折々、様々な草花を楽しむことができる。



吉竹堤に架かる「かがみ橋」



桜の名所としても知られる木場潟。春にはおよそ1,300本の桜並木が続く。

今年の五月十七日に開催された、第六十六回全国植樹祭いしかわ二〇一五の開催を記念して、植樹祭のメイン会場である木場潟と、記念植樹会場の憩いの森、そして絆の森を結ぶ全長十二キロメートルのウォーキングコース、「植樹祭メモリアルライン」が設定された。小松ウォーキング協会と小松市ノルディックウォーク協会の協力により策定されたコースは、適度な起伏があり、木場潟や白山の景観、小松の市街地や日本海も一望できるルートになっている。

木場潟公園中央園地からスタート！

梅雨入り間近の五月下旬、初夏の気持ちの良い日曜日に植樹祭メモリアルラインを歩く。全長は十二キロ。五月とは言え季節は初夏。熱中症対策にペットボトルをバッグに入れて出発。

コースの起点は、木場潟公園中央園地。日曜日ということもあって、多くの小松市民がゆつくりと散歩したり、ジョギングしたりしている。

木場潟の湖面では、カヌー競技の練習をしている光景が。拡声器で何やら選手に指示をしている声が湖面を渡って聞こえる。木場潟はカヌー競技

の開催地としても有名だ。

鳥のさえずりを聞きながらしばらく歩くと、コースは蓮代寺から千木野にかけての田園地帯と住宅地を通り抜け、憩いの森へと入る。

自然豊かな小松市民の憩いの場

憩いの森は、様々な樹木、草花であふれ、多くの野鳥や昆虫が生息するネイチャーウォッチングにも最適な森。ヤマツツジなど色とりどりの花を眺めながらしばらく歩き、少しルートから離れて吉竹堤に架かる「かがみ橋」を渡る。

「かがみ橋」を渡ると国指定重要有形民俗文化財の「白山ろく西谷の民家」が見えてくる。この古民家は、白山市鳥越村渡津の中村家住宅を移築し復原したもので、江戸時代末期に建てられたものだと言われている。

屋根は寄棟造りの芽茸で、積雪を考えると急勾配。積まれた薪がなんだかとても美しい。

◀ この緑の標識がコースの目印。





憩いの森に移築されている国指定重要有形民俗文化財の「白山ろく西谷の民家」

第六十六回全国植樹祭
天皇皇后両陛下、そして
すべての関係者の方々と先人に感謝



緑の少年団の子どもたちとともにお手植えとお手播きをされる両陛下。

今年の五月十七日、小松市木場潟公園において「木を活かし 未来に届ける ふるさとの森」を大会テーマに、第六十六回全国植樹祭いしかわ二〇一五が開催された。式典にご臨席された天皇皇后両陛下は、日用スギなどのお手植えや、ヤマザクラなどのお手播きを行われた。

今回の植樹祭では初めて木の利活用をテーマとしており、両陛下がお手植えの際に使った鋏は、昭和五十八年（一九八三年）に石川県の河北郡津幡町の石川県森林公園で開かれた第三十四回大会で、昭和天皇が種を播かれたスギの間伐材を利用して作られた。

本大会では多くの市民が大会準備に関わり、大会当日は沿道での両陛下のお出迎えとお見送りに参加した。またプロローグやエピローグの演目では、多くの出演者が心を合わせた演技を行った。今後は本大会を契機として、豊かな森林資源とその活用の知恵を残してくれた先人に感謝しながら、その資源を活用するための人材育成と産業の発展に力を注いでいく。



蓮台寺城跡からの眺めは格別。



タケノコの名産地、東山の竹林を通り抜ける。



少しアップダウンが続く絆の森。



春先には雷割草などの山野草も咲き乱れる。

この周囲は、山野草の自生地としても知られていて、春にはカタクリやシヨウジョウバカマ、雪割草などの可憐な姿を見ることが出来る。

憩いの森を抜けて、絆の森へと入る。

ここからは少しアップダウンが続くが、ウッドチップが敷き詰められているので歩きやすく、森の木々が日差しを遮ってくれるので、それほど暑さは感じない。

最後の坂を登り切り、十分ほど歩くと、県内有数のタケノコの産地、東山の竹林へ。

笹の葉が風になびく、さらさらという音が耳に心地良い。竹林を通り抜け、しばらく進んでバイパス沿いの歩道を

※植樹祭メモリアルラインのパンフレットは、「小松市役所（環境王国こまつ推進本部）」「憩いの森」「木場潟公園」「道の駅こまつ木場潟」などで無料配布されています。また、下記ホームページからもご覧いただけます。
<http://www.city.komatsu.lg.jp/10238.htm>



こまつもんゴールドにも認定されている、道場六三郎さん直伝の「六さん健康おむすび定食」

点の木場潟の中央園地まではもう少し。

全長十二キロのコースがちょっと長いかなという方や、小さなお子様連れの方は、無理に全コースを歩かなくても、道の駅から木場潟までだったり、憩いの森、絆の森のみ歩くだけでも十分に楽しめる。天気の良い日は、家族や友人、恋人同士で歩いてみると、リフレッシュできるのでオススメです。

歩き、蓮代寺インターチェンジ近くまで来ると、小松の市街地が見渡せるポイントに到着。標高はそれほど高くないが、遮るものがないので小松空港の辺りまで見通せる。この近くには、加賀の一向一揆が初めて行動を起こした蓮台寺城跡があり、さらに素晴らしい眺めが楽しめる。

さて、時間はお昼過ぎ。お腹も空いてきたので、道の駅こまつ木場潟で昼食。道の駅のレストランは平日、休日関係なく、いつ来ても人気。選んだのは、料理の鉄人、道場六三郎さん直伝の「六さん健康おむすび定食」。減農薬・減化学肥料栽培の小松のコシヒカリのブランド米である「蜜米」を使ったおにぎりは、煎った米ぬか、ゴマ、さんしょうなどがまぶされた焼きおにぎりと、海苔が巻かれた梅干し入りおにぎり。これに地元野菜たっぷりの豚汁とサラダ、和え物、豆腐がついて、お値段なんと五百円！安くて美味しくてヘルシー！

デザートに、季節限定の小松市産いちごのソフトクリームを食べて、出発。コース終

多井ぶどう園

代表 **多井一郎**さん

小松市今江町ツ 19-2
TEL : 0761-22-2458

△MAP [15 ページ④]



左が多井一郎さん。右は息子の雅宣さん。二人ともルビーロマン研究会の理事を務める。

第二次世界大戦後すぐ、多井一郎さんの父が小松市の木場湯近くの今江町でブドウ栽培を行ったのが多井ぶどう園の始まり。様々なブドウの苗を取り寄せて試験栽培し、試行錯誤しながら現在一・七ヘクタールの土地で約四十種類のブドウを栽培する。

県内におけるブドウやスイカなどの果樹栽培は、主に日本海に面した水はけの良い砂地で盛んに行われているが、多井さんの農地は砂地ではなく土。「土にはミミズが



去年の金沢市中央卸売市場の初競で過去最高の一房五十五万円の値がついたことでも全国的に話題になった。

多井さんがルビーロマンの栽培を始めたのは石川県が苗木の配布を始め

た。たくさん栄養が豊富。この土壌がブドウの木の成長に適している。また、木場湯に近いことが影響しているのか、真冬でも霜が降りないこともブドウ栽培には良いかもしれない。」と多井さん。

かつて小松市では二十軒ほどの農家がブドウを栽培していたが、一時は四、五軒にまで減少。それが現在は十軒にまで増えてきた。

そのきっかけとなったのがルビーロマン。石川県農業総合研究センターが「赤くて大粒のブドウが欲しい」というブドウ農家の願いをかなえようと、十四年の歳月を費やして完成させた品種。国内品種トップレベルの大粒でルビーのような赤色。ジュシーで酸味が少なく、さわやかな甘味が特徴だ。



収穫間近のルビーロマン。多井ぶどう園からルビーロマンが出荷されるのは八月初旬。

二〇〇五年。ルビーロマンは天気の急激な変化に弱く、水の管理など他の品種以上に手間がかかる。また厳しい出荷基準が定められているため、規格外品となってしまう率が高く、以前は合格率は三十%ほどだったが、現在でもようやく四十%ほどだそう。多井さんは、これをなんとか八十%ほどまでに高めたいと言う（ちなみに他の品種は、規格外品はほとんど出ない）。

将来は六次産業化に取り組みたいという多井さん。試験的にジャムを作ってみるところ、味はおいしいが、時間が経つとブドウに含まれる酒石酸（しよせきさん）という成分がカリウムと結びつき食感が悪くなってしまいうそう。そんな課題を克服するため、専門課と相談しながら商品開発を進めている。

多井さんが丹精込めて育てたおいしいブドウが様々な加工品になるのが楽しみです。

---Editor's Choice---

編集部おすすめ情報

ビツケ selfish color BIKKE
素材にこだわる人気のパン屋



こまつもんブランドにも認定されている小松産コシヒカリの米粉食パンや、小松産大麦ベーグルなどの他、ハード系のパンから惣菜パン、タルトやケーキまで五十品以上の商品が並ぶ。新商品の低糖質、高食物繊維、高たんぱく質の自家製麺も人気。常にお客さん目線で商品開発を続けるBIKKE。一度食べたならファンになること間違いなし。



MAP [15 ページ⑤]
小松市若杉町2丁目84 TEL.0761-21-0122
営業時間 / 8:00 ~ 19:00 (日・祝は8:00 ~ 18:00)
定休日 : 月曜・第3日曜

